

" 痛みを伴わない教訓には意義がない "

なんの気無しに取った漫画のページ目に書かれた一節には聞き覚えがあった。新兵訓練所を出て憲兵隊所属となつてすぐの頃、チョ・ソクボンが誦じるのを聞いたのだ。好きな作品の台詞だと言つて。

一度漫画を閉じ、表紙を見る。ソクボンが好きな作品とはこれだったのかと合点がいつたアン・ジュノは、ソクボン自身からそのタイトルを聞いておかなかったことを後悔した。探すのに手間と時間がかかったからではない。そんな些細な会話すら彼としなかつたからだ。

全部で二十七冊発行されたその漫画のうち三巻目までを手にしたジュノは、帽子を深く被り直して自分のブースに向かう。追手はすぐに来るだろう。一箇所に長居をしてはいけない。D・Pとして活動していた頃に学んだことだ。三冊だけ読んで、日が昇る前にマナバンを出ようと決める。

1

人波を器用にすり抜けて走る男の背中を睨みながら、営舎で見た男の履歴書を思い出す。

緊張した面持ちの青年の写真が貼られたその下、学歴記載欄には、大学時代の備考にアメフト部でランニングバックを務めていたと掠れたボールペンで書かれていた。ランニングバックはボールを持ってプレイヤーの間を縫いながらフィールドを駆け抜け、陣地の獲得を目指すポジションだ。大概は足の速い人間が任される。

足の速さでは負けていないはずだ。奥歯を噛みしめ、動きが鈍ってきた腕を振り、重い脚をがむしやらに動かす。休日の弘大を全力で走ることなど不可能だ。往來を埋め尽くす人々に肩をぶつけ、露店の商品を蹴飛ばし、誰のものともわからぬ怒鳴り声の欠片を耳で拾いながら駆け抜ける。そうまでして逃げる男を追わなければならない理由は一つだけ。仕事だからだ。

人混みが途切れ、車が行き交う通りに一足先に突入した男は、一瞬だけ後ろを振り返った。キャップ帽を目深に被り、息切れに口を大きく開いた顔は、履歴書の写真よりもくすんだ色をしており、頬がこけていた。自分を追う者がまだいることを確かめた男は顔を引きつらせ、車道を対面に向かって進み始める。車が急ブレーキをかけて止まり、けたたましいクラクションが鳴り響く。驚いて足を止めた人々の間を縫って人混みを抜け、自分も車道に飛び込んだ。

「ソンジュン止まれ！」

軍生活で染み付いた習性がパク・ソンジュンの足を止める。次の瞬間、右方から接近し

てきたタクシーをもちに食らったソンジユンの体は、放物線を描いて宙を舞った。

「打撲と擦り傷ですね。骨にも異常は無い。消毒して湿布貼ったんで、もう帰っていいですよ」

「ありがとうございます、ありがとうございます」

眠そうな声で告げた医師に恐縮し切った様子で頭を下げたのはソンジユンではなく、タクシーの運転手だ。白髪混じりの頭を何度も下げしまいには医者の手を握って感謝の意を述べている。次の患者がいるから、と鬱陶しそうに述べた医師に軽く頭を下げたソンジユンは、運転手の腕を引いて診察室を出た。

「本当にすみません。治療費は全てお出しします。通院にかかった代金はここに請求してください」

運転手は背広の内ポケットを探り、皺だらけの名刺を寄越した。安全運転をモットーに掲げたタクシー会社の名が印刷されている。

「結構です……治療費は軍から出るのです」

「そんなんじゃない私の気が済みません。私の息子も今軍にいます。国のために頑張ってる若者に私はなんてことを……」

ロビーに男の泣き声が響き渡る。膝をついて泣き出した大の男を見るのが初めてで、ど

う対応すべきかソングジュンにはわからない。すれ違う患者達からは白い目を向けられ、病院スタッフには息子さん、なんて声をかけられる始末だ。自分の父は今頃故郷の城南で犬と猫に囲まれて隠居生活を送っている。

助けを求めて視線を彷徨わせたソングジュンの視界に天然パーマの頭が映る。待合のソファに脚を組んで座ったその男は、ソングジュンの先任だ。右手に持ったスマートフォンで通話しながら左手の爪を眺めている。口は動いているが、きつと適当な返事をしているのだろう。わかりました、はい、わかりました、と抑揚のない声が聞こえる。敬意が塵ほども感じられないが彼の話し相手は上官のはずだ。

いまだ膝をつきべそをかいている運転手を見下ろす。

「おじさん、軍から連絡が来たみたいなのでもう行きます。治療費はいりません」

「じゃあせめてこれを持っていきなさい」

運転手は自身の服のあらゆるポケットを漁り、かき集めたくしゃくしゃの紙幣をソングジュンに差し出した。いやだわ、と野次馬たちが小声で言う。父親から金をせびったようにも見えているのかもしれない。

「とにかく、いりません！」

追いつがる運転手の手を振り解いて早歩きで進む。がんばれよ軍人さん、ととどめを刺されたソングジュンの顔は反射的に歪み、そのままの顔で先任に声をかけた。きゅつとつり

上がった双眸がソングジュンを捉え、とたんに眉間に深く皺が寄る。わざとらしいまでのその表情は自分の真似をしたのだとすぐにわかった。文句を言いたい気持ちの堪える。電話からはまだ上官の怒鳴り声が漏れている。

あー、急に電波がー、とおどけた調子で言った先任は、一層激しさを増した怒鳴り声にも構わずに通話終了ボタンを押した。黒い画面には地藏中士と表示されている。スマートフォンを上着に収めた先任が首を傾げる。その拍子に天然パーマの頭がふわふわと揺れた。

「もう退院？」

「はい。行きましょう」

「オッケー」

先任の名はハン・ホヨルといった。階級は上等兵。除隊まで五ヶ月を切っている。D・Pの組長で、チョ・ソクボン一等兵の自殺未遂事件の重要参考人であるにも関わらずD・Pを解任されていない、特異な人物だ。通常、兵長に進級した者はD・Pを解任され普通部隊での勤務となるため、残り一ヶ月で兵長となるホヨルはそのままD・Pとして働かせることにしたのか、それとも脱営した軍番息子を捕まえるまで辞めるなという見せしめのどちらかだろうとソングジュンは考えている。

誰もが鼻を摘むような経歴の男に会うまでは恐々としていたが、いざ会ってしまえばなんてことのない普通の人間だった。暴力を振るわず、暴言も吐かない、普通の人間。

「あのまま走り抜けてれば轢かれなかったな、ごめんごめん。ここは俺のおごりだから」
うどんを口に入れたままホヨルはももごと喋った。おごりと言ったところでどうせ活動費から払うのはわかっているが、先任に頭を下げられては大丈夫だと答えるほか無い。実際、打撲と擦り傷で済んだのだから、訓練での怪我に比べれば無傷も同然だ。箸を動かすだけで痛む脇腹を押さえながら麺をすすする。冬の空気で冷やされた体を温かいうどんが癒してくれる。器の温もりが移った指で耳に触れると、寒さによる痛みが少しだけ和らいだ。屋内で食事をしたかったが活動費には限りがある。安上がりの屋台で済ませるのはよくあることだった。

「それにしてもおまえ足速いな。全く追いつけなかった」

「中学からずっと陸上部でした」

「へえ。まさか国体に出たことある？」

「そこまでじゃないです」

「でも俺より速く走ってくれるから十分だな」

「はあ……」

「おねえさん、二人分おかわりください」

店主の女性にホヨルが声をかける。部隊を出る際に渡された二〇万ウォンの活動費はすでに残り少ない。一杯四千ウォンのうどんすら贅沢品になる。茹で上がった麺が載った皿

を両手に店主の女が近づいてきた。湯気が立ち上る乳白色の麵は旨そうだが、ここで食べれば四千ウォンのロスだ。ホヨルの器に替え玉が入れられるのを見ながら店主に声をかける。

「あの、僕は結構です」

「いいのよいいのよ、おまけするからたくさん食べなさいな。軍人なんだから栄養つけないと」

そう言った店主はソンジュンの器にも替え玉を入れた後、オデンの鍋から何本か串を取ると皿に載せてカウンターに出した。ホヨルが感嘆の声を上げて店主を見上げる。

「ありがとう、おねえさん」

「適当なことばっか言っちゃって」

けられらと笑う女性は言葉ほどは嫌がつていないのがソンジュンにもわかった。店主が背中を向けたと同時に小声のホヨルが「人の優しさはありがたくいただかない」と言うので感心してしまう。人をたらしこむ才能があるから、彼は初対面の人間の心を次々と開かせ、込み入った話まで聞き出してしまふ。D・Pに必要な技術だ。

替え玉が入れられたうどんに唐辛子を足し、箸でくるくると回しながらソンジュンは問う。

「ハン上兵、僕らはなぜここであどんを食べているのですか」

「腹が減ったから」

「でも……ユンジェを探さないと、中士に殺されます」

「本当に殺すわけないだろ。こんなご時世で」

オデンを頼張る横顔に、そうですよねとは返せなかった。先月二人が所属する第一〇三師団において殺人事件があったばかりだからだ。直前にも兵士の自殺未遂が発生しており、対応に追われた師団の混乱の中、追い討ちのように脱営事件が頻発した。そのうちの一人はあろうことか脱走兵を追うはずのD・Pだった。ミイラ取りがミイラになったと揶揄う者は少なくなかった。

逃げた二等兵の席に補填されたのが江原道一般義務警察として入隊していたソンジュンだった。D・Pへの風当たりが強くなった状況で運悪くD・Pに引き抜かれてしまった二等兵が、プレッシャーを感じないわけがない。もし平然としていられるとしたらよほどのバカか無神経だとソンジュンは思っている。今朝捜索に送り出される際、「イ・ユンジェを捕まえてこなければお前らを殺して俺が脱営する」と告げた上官、キム中士の薄ら笑いを思い出すだけでも悪寒がする。

「あそこ」

具がひとつだけ残ったオデン串でホヨルが指し示したのは、駅ビルの二階にあるチムジルバンだ。イ・ユンジェが滞在していることが聞き込みで判明し、昼に踏み込んだ際に実

際にユンジェを見つけた場所。病院を出た足でそのままここに戻ってきて、近くにある屋台でうどんを食べているのだ。

「ユンジェはもう戻らないと思いますけど」

「逃げた時のユンジェの格好は覚えてるか」

「えつと……黒のセーターに灰色のスウェット……黒いキャップ帽を被ってました」

「荷物は」

「なかつたです。あ、そうか。取りにくるかもしれないですね」

「うん」

最後の具を頬張るホヨル。串を杖のように振りながら話は続く。

「ユンジェが逃げてから一ヶ月が経つ。その間何の荷物も持たずに生きるのは人間にはできない。必要だろ、替えのパンツとか」

「パンツくらいならポケットに入る気が」

「お前が病院で運転手とよろしくしてる時に電話で確認したら、リュックサックがロッカーに残されてるってことだった。中にはユンジェの身分証入りの財布、封筒入りの現金、服なんかが入ってるらしい。おまえオデンは嫌い？ いらぬならもうけど」

「あげません」

無遠慮に伸ばされた手から底うようにオデンを口に入れる。

「でも捕まりたくないウンジェが戻ってくるとは思えません」

「それは普通だろ？ 脱走兵は予測可能な動きはしない。それにウンジェはラガーマンだ」

「アメフトです」

「そう、アメフト選手だ。いざとなったらリュックサックを店員から奪って追手をなぎ倒して逃げられると自負してるはずだ」

オデンを咀嚼しながら大通りで逃したウンジェの顔を思い出す。今思えば、振り返った時にウンジェは笑っていた気がする。一向に追いつかない自分達を馬鹿にしていたのだから、とソンジユンと思う。追いつけなかった悔しさが記憶にいらぬ補正をかけたのかもしれないが。

「どうせ金がなきゃどこにもいけないよ。俺たちもそうだ。帰りの交通費だけ残そうと思っただけでもどこにも行けない。だからここでおいしいどんを食べて、ウンジェの帰りを待とうじゃない」

なるほど、と納得しかけたソンジユンの視界の隅で、店主が動きを止めたのがわかった。「もう閉店時間だけど。それ食べたなら帰ってね」

「えー！」